

日英語の表現形式についての一考察 —その対照性を通じて—

有吉 淳一郎

1. はじめに

外国語を学習する際、私たちはその単語を一つひとつ日本語に対応させて覚えていく。英語であれば、bookは本、skyは空、といった具合である。これらの語に関しては、英語と日本語との間に何ら意味的な差異はないように思われるが、すべての語がそうであるとは限らない。

このことを示す好例の1つが、動詞persuadeと「説得する」である。両語は互いに意味的に対応しており、まさに同義であると思われるかもしれないが、実際のところ、そうとも言えないのである。このことは、以下の日本語文の英訳を考えてみることで明らかとなる。

(1) 私は彼に行くように説得したが、彼は行かなかった。

さて、この文はどのように英訳されるであろうか。何のことはない、以下のとおりで問題ないのでは—このように思われるかもしれない。

(2) *I persuaded him to go, but he didn't go.

しかしながらアスタリスクが示しているように、この文は容認されないのである。それはなぜか。(1)のように日本語で、ある人物に何らかの行為をするように説得した、という場合、その人物が当該行為を実際に行ったかどうかに関してはニュートラルであるのに対し、persuadeを用いた英文(2)では、当該行為が実際に行われたということが含意されるからである。(1)では文章全体として矛盾はないものの、(2)では前半部分において、彼が行くという行為を遂行したとい

うことが述べられているにも関わらず、後半部分においてその内容が打ち消されているために、矛盾が生じてしまっているわけである。日本語では、相手に対してある行為を行わせようと働きかける、いわばその努力がもっぱら表されており、実際に相手が当該行為を行ったか否かまでは、その意味範囲には含まれないのである。一方、英語では、そのような働きかけの結果、相手が実際に行動を起こしたということが含意されるのである。

このように、日本語と英語について、語のレベルですら、意味的なギャップが認められ、きれいに対応していないケースがあることを考えると、文レベルにおいても同様の状況が生じるであろうことは想像に難くないであろう。

例えば次の文は、どのように英訳されるであろうか。

(3) ここはどこですか。

非常にシンプルな文章である。道に迷ったために自分のいる場所を尋ねているわけであるが、例えば学生にこの文章を英語に直すように言うと、どのように作文するであろうか。「ここ」はhere、「どこ」はwhereであり、あとは両者をbe動詞でつなげればよい—このような発想に基づき、多くは以下のように訳出するものと思われる。

(4) Where is here?

文頭にwhere、次にbe動詞、そして最後に主語であるhereを配する。語彙ならびに語順とも、何ら問題はなさそうである。しかしながら、英語話者は実際にはこのような言い方はしないのである。上記(3)に対応する適切な英訳は次のとおりである。

(5) Where am I?

どうであろうか。直訳すれば「私はどこですか」である。これは日本語話者には非常に奇妙に響く。ん？そこにいるじゃないか、とでも言いたくなるような感じである。道に迷った人物が自分の居場所を人に尋ねるといった状況は同じではあるものの、そこで発せられる表現形式は日本語と英語とでは大きく異なるのである。

以上は2つのことを示唆する。まず1点目は、ある事象を言語化する際、日本語には日本語的発想に基づいた日本語らしい表現形式がある一方で、英語には英語的発想に基づいた英語らしい表現形式があるということである。日本語話者は日本語の発想に基づいて英訳をするために、英語話者はそのようなプロセスを経て作り出された英文に対して違和感を抱き、そして日本語話者は、英語話者の発する英文を日本語の発想に基づいて捉えるために違和感を抱くわけである。そして2点目は—これは1点目からの帰結でもあるが—英語学習において、英語的発想と日本語的発想について理解することによって初めて、真の意味での英語力を獲得することが可能になるということである。その理解なくしては、たとえ語彙、文法、発音など、さまざまな知識を身につけようとも、英語学習は表面的なものに留まってしまおう。

英語的発想および日本語的発想とは、どのように特徴づけられるのであろうか。本稿では、表現形式における英語らしさと日本語らしさの根底をなす「英語的発想」「日本語的発想」について、その対照を交えながら考察を進めていく。

2. 「名詞中心」と「動詞中心」

英語的発想および日本語的発想の特徴として、英語では名詞を中心として文が構成されるのに対し、日本語では動詞を中心として文が構成されるといった傾向が挙げられる。本節では、英語から日本語、日本語から英語、それぞれの訳出のあり方を通じ、この特徴について概観していく。

2.1. 日本語への訳出

初めに英語から日本語への訳出について見ていく。以下の英文をご覧ください。

- (6) Sparse hair or, worse still, baldness makes impossible the natural wish of men and women to be just like other people. The mere fact of looking so different causes disdain, suspicion and ridicule. (安西 2000: 9)

2文から構成されているので、まずは最初の文について検討する。この文は構造的には、冒頭のsparseからbaldnessまでが主語、makesが動詞、impossibleが補語、そしてthe以下全体が目的語であり、SVCOの形式となっている。本来的にはSVOCである文型が、目的語部分が長いために、目的語と補語の順番が入れ替わった形となっているわけであるが、この英文はどのように日本語に訳されるであろうか。安西（2000: 10）はこの文を忠実に直訳したものとして、以下を提示している。

- (7) 薄い髪、あるいは、さらに悪いことに禿^{はげ}は、男と女の他の人々とちょうど同じでありたいという自然な願望を不可能にする。

「～は～を～にする」といった、makeを主動詞とするSVOCの文型にまさに則った訳出である。もちろんこの直訳で原文の意味するところは十分理解できるわけであるが、日本語としては全体的に今ひとつしっくりこないように思われる。

この直訳に対して、安西（2000: 46）は原文の自然な日本語訳として以下の文を提示している。

- (8) 人間なら誰しも、人と同じようでありたいと願うのは自然なことだ。ところが髪が薄かったり、もっと始末が悪いことにまるきり禿げていたりでは、こうした願いも空しいものになってしまう。

確かに、直訳である（7）と比較すると、こちらの方がこなれた、自然な日本語であるといった印象を受ける。ここで感じられる、日本語としての自然さ—換言

すれば、日本語らしさ一の要因は、どこに求められるのであろうか。直訳による訳文 (7) では目的語は非常に長い修飾要素を伴っているのに対し、(8) ではこの部分を「～と願うのは自然なことだ」と、ここでいったん文をまとめ、その上で訳出を再開しているわけであるが、ここで着目したいのは、この後半における以下の部分である。

- (9) 髪が薄かったり、もっと始末が悪いことにまるきり禿げていたりでは、こうした願いも空しいものになってしまう。

直訳 (7) では、原文冒頭の *sparse hair* を「薄い髪」として、同様に *baldness* についても「禿」として、つまり、元々名詞であった要素を訳出においても忠実に名詞として日本語に置き換えていたわけであるが、着目すべきは、自然な日本語と感じられる (9) においては、これら英語の名詞部分が、「髪が薄かったり」「禿げていたり」というように、動詞的に訳出されているという点である。このように、英語における名詞表現を動詞的にほどこくようにして訳出することによって、日本語らしさという特質がもたらされているのである (安西 2000: 44-46)。

続いて、原文の2文目についてである。

- (10) *The mere fact of looking so different causes disdain, suspicion and ridicule.*

この文の直訳はどのようなになるであろうか。安西 (2000: 10) による直訳は以下のとおりである。

- (11) そんなにちがって見えるという単なる事実が、軽蔑、疑惑、そして嘲笑を生む。

概略、「事実が軽蔑、疑惑、嘲笑を生む」となっている一名詞が名詞として、そ

して、動詞causeの「～が～を引き起こす」といった語義に則り、忠実に日本語に訳されている。品詞と文型の両面において、原文とパラレルな形となっていると言えるであろう。

このような直訳に対し、安西（2000: 48）では自然な日本語訳として次の文が提示されている。

- (12) ただ外見がちがっているというだけで、人から馬鹿にされたり、怪しまれたり、嘲笑されたりしてしまうのである。

原文の主語the mere fact of looking so differentについて、直訳では「そんなにちがって見えるという単なる事実」というように、名詞が名詞として訳出されていたが、(12) では、「ただ外見がちがっているというだけで」というように、原因を表す副詞として訳出されている。その上で、動詞cause以下の目的語部分について、原文では、disdain、suspicion、ridiculeと名詞が連続しているが、この部分が、「馬鹿にされたり、怪しまれたり、嘲笑されたりしてしまう」というように、動詞中心の表現に置き換えて訳出されているわけである。直訳である(11)と比較してみると、前掲の(7)と(8)の場合と同様、(12)の方が日本語らしい表現であることは明らかであろう。

以上に引き続き、安西（2000）に基づいてもう1例検討してみる。

- (13) A slight slip of the doctor's hand would have meant instant death for the patient. (安西 2000: 62)

この英文について、文の構造としては、「医師の手がわずかに滑る」という事象を描写するのに、まず「滑り」という名詞slipを中心に据えた上で、形容詞slightを前置させ、そして、滑るという事象の主体であるthe doctor's handを前置詞ofを介して後続させている。このようにして、当該の出来事全体を1つの名詞句としてまとめて表現している。これが主語の部分である。動詞meant以下の目的語

部分についても同様に、「患者がすぐに亡くなる」という事象について、「死」という名詞deathの前に形容詞が、そしてその後には前置詞句が配置されており、全体としては、「患者にとっての即座の死」という意味の名詞句としてまとめられている。文全体としては概略、「手の滑りが死を意味しただろう」となっているわけである（安西 2000: 62）。実に英語の表現形式を特徴づける、名詞中心型の構造となっているのである。

さてここで、この英文の直訳と意識を比較してみる。安西（2000: 63）はそれぞれ以下のとおり提示している。

- (14) a. 医者の手のはんのわずかの滑りが、患者のたちどころの死を意味したであろう。
b. 医者の手がほんのわずかに滑っても、患者はたちどころに死んでいたであろう。

これまでの例と同様、やはり原文を直訳したものに比べ、意識したものの方が自然な表現と言えるであろう。「ほんのわずかな滑り」が「ほんのわずかに滑る」、「患者のたちどころの死」が「患者はたちどころに死ぬ」というように、直訳では名詞を中心として表現されている部分が、意識の方では動詞を用いた表現に置き換えられている。意識に対して感じられる日本語らしさとは、動詞を中心とした訳出に求められるのである。⁽¹⁾

以上、英語と日本語の表現形式を比較対照し、英語は名詞中心的であるのに対し、日本語は動詞中心的であることを見てきた。両語にはこのような差異があるゆえに、英語をその表現形式に忠実に、すなわち、名詞を日本語においても名詞として訳出すると日本語らしさに欠くといった状況が生じるわけであるが、場合によっては、英語を和訳する際に対応する名詞がないために、名詞を用いての訳出自体が不可能であることが、外山（1992: 109）で指摘されている。

- (15) He is a heavy smoker.

この文は「彼はひどくタバコを吸う」といったように、動詞的に訳すことによって自然な日本語となるわけであるが、名詞を用いて和訳しようとする、heavy smokerに相当する名詞がないために、当該語句そのものを日本語化して「彼はヘビースモーカーだ」とする他ないのである。例えばfluent speakerであれば、まだ「流暢な話者」と訳せないでもないが、heavy smokerについては、仮に名詞を用いて「ひどい喫煙者」と訳したとしても、日本語としての体をなさないであろう。この点で言えば例えば、He is a poor grammarian.も同様であり、名詞を用いて日本語にするのは困難である（外山 1992: 109）。「彼はお粗末な文法家だ」と訳出したところで、上述の事例と同じく自然な日本語からは逸脱してしまう。動詞を用いて「彼は文法をよく間違える」といったように訳出せざるを得ないのである。これらのことは、英語と日本語とが、表現形式の根底をなす発想の部分で異なっているということの反映と捉えられるであろう。

以上、英文から日本語への直訳と自然な訳出との比較を通じて、英語は名詞中心のであり日本語は動詞中心のであるという対照性について考察してきた。このような対照性は、換言すれば、日本語文を英語に直す場合、日本語で動詞が用いられている部分を、名詞を用いた表現に置き換えることによって、英語らしい、より自然な形での訳出がなされることを意味する。そこで、以下ではこれまでとは逆に、日本語から英語への訳出について考察を進めることとする。

2.2. 英語への訳出

木村（1993）では、日本語と英語の表現形式における特徴について、7つの視点から論じられている。そのうちの1つが、まさにこれまでに見てきた、英語は名詞中心のであるのに対して日本語は動詞中心のであるという観点であり、日本語から英語への訳出についての考察がなされている。まずは以下をご覧ください。

(16) 彼はあきらめやすい。

(木村 1993: 25)

この文を英語に直すとしたら、どのようになるだろうか。主語はheとなるであろうが、「あきらめやすい」の部分は何のように表現されるであろうか。この文の英訳について、木村（1993: 25）は、日本語的発想に基づく次のようになるのではないかとしている。

(17) He gives up easily.

「あきらめやすい」のであるから、「すぐにあきらめる」と考え直す。そこで、「あきらめる」をgive upとし、「すぐに」をeasilyとするのではないかと、いうわけである。句動詞give upは日常的に用いられるし、またeasilyについても形容詞easyの派生形であることから、この文は我々からするとごく自然な表現であるように思われる。

しかしながら、この（17）は文法的にも何ら問題はないものの、日本語文（16）に対する英語らしい訳出とは次のとおりなのである。

(18) He is a quitter.

（木村 1993: 25）

文字どおりに訳すと、「彼はすぐにあきらめる人だ」といった感じである⁽²⁾。この日本語の不自然さからも分かるように、表現形式として日本語では名詞中心のな形が好まれないのに対し、英語では、直訳すれば「すぐにあきらめる人」といったような名詞中心のな形をとることによって、英語らしい、自然な訳出がなされるのである。

同様の例は、外山（1992: 46-47）においても論じられている。例えば以下の文はどのように英訳されるであろうか。

(19) あの人は英語を流暢にしゃべる。

「英語を流暢にしゃべる」であるから、動詞speakを用いて、

(20) He speaks English very fluently.

というように訳出すればよいのではないか、と思われるかもしれない。しかしながらこの場合においても、(20)には文法的に問題があるわけではないものの、

(21) He is a fluent speaker of English.

というように、日本語とは対照的に、名詞を中心とした訳出が自然なのである。引き続き別の例を見てみる。

(22) 彼女は小声で笑った。 (木村 1993: 22)

主語、副詞、動詞から構成される非常にシンプルな文であるが、どのように英訳されるであろうか。木村 (1993: 22) は、一般的には次のように文を組み立てていくのではないかとする。

(23) She laughed...

すなわち、主語は「彼女」であるのでsheとし、動詞は「笑った」であるのでlaughを用いてlaughedとし、まず「彼女は笑った」という、主語と動詞の部分を組み立てるであろう、というわけである。「彼女は笑った」という日本語は、「～が～する」という主語+自動詞のパターンである。通例我々はこのようなパターンの日本語を英訳する場合、動詞部分について、例えば「泳ぐ」であればswim、「歩く」であればwalk、「叫ぶ」であればshoutといったように、英語でもそれに対応する自動詞1語で表そうとするだろう。そこで、「笑う」についても同様に、動詞laughを用いて訳出するのではないかと、いうわけである。

ここまで英語にすれば、あと残るのは修飾語「小声で」である。この部分に関し木村 (1993: 22) は、前置詞句や副詞を用いてin a low voiceやquietlyなどとし、

結果的に上記 (22) の英訳は日本人の発想としては、例えば次のようになるのではないか、とする。

(24) She laughed quietly.

確かにこのような訳出が一般的であると思われるし、この英文自体、文法的な観点からも何も問題はない。しかしながら、英語的発想に基づいてなされる訳出とは次のとおりなのである。

(25) She gave a little laugh.

(木村 1993: 23)

「笑う」というのは言うまでもなく「行為」である。この「笑う」という行為を訳出するのに、動詞のlaughを用いるのではなく、「笑い」という「名詞」のlaughを用いて動詞giveの目的語とする。その上で名詞laughを形容詞littleで修飾することによって、「小声で」といった副詞部分の意味を表す。我々日本語話者は、動詞中心的な表現形式を志向する傾向があるために、「笑う」という行為を英訳する際には動詞のlaughを発想しがちであるが、このように、日本語では動詞を用いて表現される部分を、英語では名詞を軸として表現することによって、英語らしさがもたらされるのである。(25)における英語らしさについても、まさにこれまでの他の事例と同様、日本語では動詞で表現されている部分が名詞に置き換えて表現されているという、その表現形式の特徴に求められるのである。

3. 「肯定形」と「否定形」

実質的に同一の事象を描写するのに、ある言語では肯定的な表現が用いられるのに対し、別の言語では否定的な表現が用いられる—このことは相反するようと思われるが、英語と日本語の表現形式を比較してみると、事実、そのような対照性が確認される。英語では肯定的な表現が用いられる一方で、日本語では否定的な表現が用いられるといった傾向があるのである (木村 1993: 110)。

例えば、ミスがあるかないかを調べる場合、英語では積極的にミスを求めるかのような表現が用いられる。以下のとおりである。

(26) Check it over for mistakes. (木村 1993: 111)

この英文は直訳に近い形で和訳すれば、

(27) ミスを見つけるように、よくチェックしなさい。

といった感じになるであろうが、日本語としては不自然な感じがするのは否めないであろう。日本語ではこのように肯定的に訳すのではなく、次のように否定形の表現を用いて訳出する方が、違和感なく受け入れられるであろう。

(28) ミスがないか、よくチェックしなさい。

日本語ではこのように、否定的な言い回しを用いる方が自然な表現として好まれるのである。

このような対照は他にも見受けられる。

(29) a. Ann wrote the review before she had read the whole book.

b. アンはその本を全部読み終えずに書評を書いた。

これは『ウィズダム英和辞典』（第3版）の接続詞beforeの用例とその訳文である。beforeの基本的語義は、過去もしくは未来におけるある時点を規準にした上での、「～する前に」である。そこで、この場合においても直訳すれば、「アンはその本を全部読み終える前に書評を書いた」となるであろうが、どことなく落ち着かないといった印象を受けるのではないだろうか。この場合も、英文の肯定形を文字どおりに、ではなく、(29b) のように「～せずに」といった否定形を用いて訳

出する方が日本語の感覚としては自然であろう。⁽³⁾

このような、英語では肯定的な表現形式が用いられ、日本語では否定的な表現形式が用いられるという傾向は広く散見される。例えば以下の文をご覧ください。中学校などで学習する比較構文の例文としてよく見かけるタイプの文章である。

(30) This is the most beautiful picture that I have ever seen.

直訳は「これは私が今までに見た最も美しい絵です」となるが、日本語としてはやはり否定形を用いて、次のように訳した方がずっと自然であろう。⁽⁴⁾

(31) 今までにこんなに美しい絵を見たことがない。

以下も類例として挙げられるであろう。⁽⁵⁾

(32) a. Jack would be the last person to betray us.

b. ジャックが私たちが裏切るなんてありえない。

(33) a. Remember the Pearl Harbor.

b. 真珠湾を忘れるな。

(32a) は先述の例と同様、比較表現を用いた構文である。形容詞lastは順番を表し、「最後の、最終の」という意味でよく用いられるが、the last ~ to doの形式で、「最も…しそうにない～」の意を表す。この英文は肯定文であり、よって文字どおりに日本語にすれば、「ジャックは私たちが裏切る最後の人だろう」となるわけであるが、実際には(32b)のように否定形で訳出しなければしっかりとこないであろう。(33a)についても、直訳は「真珠湾を覚えている」となるわけであるが、日本語としては、このような肯定的な言い回しではなく、(33b)にあるような否定形での訳出の方が自然であろう。⁽⁶⁾

英語と日本語におけるこのような対照性はことわざにも見られる。

(34) Where there's smoke, there's fire.

文字どおりに訳すと「煙がある所には火がある」となるが、この場合においても以下のとおり、否定形を用いての訳出が日本語らしい自然な表現形式であると言えるであろう。

(35) 火のない所に煙はたたぬ。

ことわざでいえば、以下も好例であろう。

(36) Seeing is believing.

直訳は「見ることは信じることである」となるであろう。このことわざの意味については、以下のとおり英英辞典でも確認される。

(37) seeing is believing: used to say that you will only believe that something happens or exists when you actually see it

(LDOCE⁶)

しかしながらここでもまた、否定形を用いて、「百聞は一見にしかず」とする方が日本語らしさが感じられるのではないだろうか。

以上、英語とは対照的に、日本語では否定的な表現が用いられるという傾向が見られるわけであるが、日本語におけるこのような表現形式上の特徴は、他にも下記のとおり広く見受けられる。いずれにおいても、実質的に肯定的な意味内容を表しているにもかかわらず、否定の形式が用いられている（森田 1998: 117-119）。

- (38) a. お礼の申しようもございません。
b. コーヒーでも飲んで行かないか？
c. 早くお正月にならないかなあ。
d. 冗談じゃない！

aでは相手に対するお礼の気持ちが十分にあり、bにおいては相手に対してコーヒーを飲んで行くことを勧誘しており、cでは正月が早く来ることが願望されている。そしてdは詠嘆表現としての形式である。文字どおりにその陳述内容について否定されているわけではなく、肯定的な内容が示されているのである。

このように、日本語が否定形の表現形式によって特徴づけられるのとは対照的に、英語では肯定的な表現形式が用いられる傾向があるわけであるが、英語においては、相手に対する物事の申し出や商品の広告宣伝などの状況において、助動詞mustや命令文といった、本来的には行為遂行の義務を表す強意的な表現形式が用いられる場合がある。以下のとおりである。

- (39) You must eat this cake.

相手にケーキを勧めているわけであるが、このような場合、英語ではmustが用いられる。「食べなければならない」と、相手に義務を課しているわけではない。相手への好意性に基づく積極的な申し出である。以下は命令文の例である。

- (40) DRINK Coca-Cola

有名なコカ・コーラのキャッチコピーである。形式的には命令形であり、文字どおりに日本語に訳せば、「コカ・コーラを飲め」となる。日本語話者の感覚としては、このように言われると到底飲む気は起こらないわけであるが、英語ではこのような強い積極性を伴う言い回しが用いられるのである。⁽⁷⁾

この点、日本語は対照的である。英語では例えば先述の(39)のように、何か

食べ物を勧める場合、mustといった強意的な表現が用いられ、相手への積極的な働きかけがなされるのに対し、日本語では次のような消極的な表現が用いられる。

- (41) a. お口に合わないかもしれませんが… (安藤 1986: 282)
b. 何もございませんが… (ibid.: 283)

英語話者が相手にぜひ食べてみるようにと積極的に働きかけるのに対し、日本語話者は、たとえ自分ではおいしいと思っていたとしても、相手もがそれを好むかどうかは不明であり、よって消極的な言い回しを用いるのである（安藤 1986: 283）。このような、英語と日本語の表現形式に見られる積極性と消極性とでも呼ぶべき対照性についても、英語では肯定的な表現形式が用いられるのに対し、日本語では否定的な表現形式が用いられるという構図の中で捉えられるであろう。

4. おわりに

以上、本稿では英語と日本語の対照を通じ、その表現形式についての考察を行った。我々は事態描写において、自身の母語に特有のあり方で発想し、言語化していく。ゆえに、異なる言語間では表現形式も異なりうる。外国語の習得において、いわゆる文法事項や語彙などの学習が不可欠であることは言うまでもない。しかしながら同時に、個々の言語を特徴づける発想のあり方を理解することによって初めて、その習得は可能となる、と言っても過言ではないのではないだろうか。

注

- (1) ここでの日本語らしさの要因としては他にも、原文での無生物主語が副詞的に訳出されているといった点も挙げられるであろう（安西 2000: 62）。
(2) quitterの語義について、単に「あきらめる人」ではなく、「容易に」といった内包的意味を伴うという点に留意すべきであろう（cf. 木村（1993: 26））。この含意につ

いては、例えばOALD⁹の定義においても、a person who gives up easily and does not finish a task they have started (下線筆者)、と確認される。

- (3) 『ウィズダム英和辞典』(第3版)の接続詞beforeの項には、用例訳出中の「～せずに」の他、語義として「～しないうちに」が記載されている。
- (4) 木村(1993: 111)では(30)(31)の類例として、That was the worst speech that I've ever heard.と、あんなひどいスピーチは聞いたことがない、の対比が挙げられている。
- (5) (32a, b)は『ウィズダム英和辞典』(第3版)の形容詞lastの用例より。
- (6) 『毎日新聞』(電子版)においても否定形で訳出されている(2018年3月12日アクセス; <https://mainichi.jp/articles/20171107/k00/00m/030/138000c>)。
- (7) 外山(1992: 167)に基づく。なお外山では、言語心理、敬意などの観点から論じられている。

参考文献

- 安藤貞雄. 1986. 『英語の論理・日本語の論理—対照言語学的研究』東京：大修館書店。
安西徹雄. 2000. 『英語の発想』東京：筑摩書房。
木村哲也. 1993. 『英語らしさに迫る—日本人の発想・英語の視点』東京：研究社出版。
外山滋比古. 1992. 『英語の発想・日本語の発想』東京：NHK出版。
森田良行. 1998. 『日本人の発想、日本語の表現』東京：中央公論社。

辞書

- Longman Dictionary of Contemporary English*⁶. 2014. Harlow: Pearson Education.
[LDOCE⁶]
*Oxford Advanced Learner's Dictionary*⁹. 2015. Oxford: Oxford University Press.
[OALD⁹]
『ウィズダム英和辞典』第3版. 2012. 井上永幸・赤野一郎(編). 東京：三省堂。